

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 2 年 7 月 12 日現在

機関番号：23501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13372

研究課題名（和文）大衆文化における映画製作所「P・C・L」とそのテクノロジーと撮影制度の歴史的機能

研究課題名（英文）The Historical Function of Film Studio P.C.L.'s Technology and Production System within Mass Culture

研究代表者

ヨハン ノルドストロム（Johan, Nordstroem）

都留文科大学・文学部・講師

研究者番号：00794322

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は過去のメディアを分析することによって現在のメディアの状況を相対化する「メディア考古学」の視点をを用い、メディアミックスの起源となる映像文化を理解することを目的に実証研究を行った。

具体的には30年代のサウンド・テクノロジーと、トーキー映画製作所「P・C・L」のモダンイメージについて資料調査を通じて明らかにした。前者について、最新技術が当時の映画業界にどのように受け止められ影響を与えたのが考察し、各製作所が独自に製作したサウンド映画、特にサウンド版と言われる様式について分析した。また後者について、製作所の近代的な設備・レビュー界スター達の登用・ミュージカル映画の製作等の事例を調査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

このプロジェクトで行った、映画製作場の視点から映画史を巡る研究は今までに日本ではあまりされておらず、映画研究の中では非常に注目すべき大きな一歩と言える。

またアカデミアの世界だけではなく、国際映画祭を通して、幅広く海外の映画界において日本の戦前映画史を広めることができたインパクトがある研究と言える。

研究成果の概要（英文）：This research project has investigated various forms of past visual culture from the vantage point of media archaeology, elucidating their origin, form and function, and thereby also creating a greater understanding for our modern contemporary forms of media mix. Concretely, this project has investigated the sound technology of the 1930s, and the modern image of the sound film studio P.C.L., by close examination of various historical data. I have examined how the film world theoreticized regarding the Japanese film industries gradual transition to sound. I have also examined how various film studios utilized the new sound technology in different ways so as to capitalize on the new technology, focusing on the transitional so called 'saundo-ban' film format. Furthermore, I have closely examined how studio P.C.L. created its modern image, through the use of its modern studio facilities and equipment, recruiting of actors from the revue stage, and creating of musically infused films.

研究分野：芸術一般

キーワード：日本映画 映画史 映画製作 トーキー映画 映像メディア 大衆文化 日本映画史 映像学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本映画史の研究において、日本を代表する映画会社である東宝に発展する P・C・L (Photo Chemical Laboratory) が、日本映画界のプロダクション・システムに与えた影響と、さらにテクノロジーとプロデュース制度の関連性は、これまで重要な研究対象とは考えられてこなかったため、より詳細な研究が求められている。1930 年代の撮影所については、これまでも少なからず論及の対象とはなってきたが、P・C・L 撮影所が 1930 年代の日本映画とプロダクション・システムに与えたインパクトについては殆ど顧みられてこなかった。さらに、1930 年代のプロデュース制度とサウンド・テクノロジーの関連、ひいては大衆文化との関係について、これまで詳細な研究は行われてこなかった。本研究は、このような研究状況を鑑み、映画製作所 P・C・L を通して、1930 年代の日本のプロデュース制度の変化とサウンド・テクノロジーとの連続性という観点から捉え直すことで、日本の映画研究における、撮影所研究 (film studio studies) とメディア考古学 (media archeology) という二点の研究分野の確立に寄与するものである。

従来、P・C・L は、黒澤明や成瀬巳喜男などの作家論、作品論を中心に映画史の先行研究で論じられてきた。たとえば、佐藤忠男は日本文化論の枠組みのなかで、作家主義的に P・C・L を論じている (佐藤忠男『日本映画史』2 巻、1995 年)。しかし、P・C・L は、日活や松竹といった、日本演劇の伝統的慣習を引き継いだ、大正時代以来の撮影所とは全く異なるシステムによって、映画が製作されたことに特色がある。それは黒澤や成瀬といった巨匠の作品においても例外ではない。具体的には、小林一三の支援のもと、サウンド・テクノロジーを実験的に取り入れ、知識人が中心となって、ハリウッドのプロデュース制度を導入し、伝統的な徒弟制度を排した撮影所を建設したところに特色がある。

第一に、初期トーキー (サウンド映画) が、1930 年代にどのように製作されたか、または大衆文化の中で、映画がなぜある形態に固まったのかをより深い理解するために、撮影所研究とその製作制度の考察は不可欠である。たとえばデヴィッド・ボードウェルは、ハリウッドの古典映画のスタイルと大衆文化商品としての位置を分析することで、ハリウッドの製作制度が根本的なところから大きな影響を受けたことを指摘している。(David Bordwell, *The classical Hollywood cinema: Film Style & Mode of Production to 1960*, Columbia University Press, New York, 1985)。また、トマス・エルセサーは、新しい映像産業や現代のメディアミックスを理解するために、過去のテクノロジーとそのメディアミックスを再考すべきであると述べている (Thomas Elsaesser, *The New Film History as Media Archaeology*, *Cinemas: Journal of Film Studies*, 2004)。本研究は、こうした 1930 年代における P・C・L が、日本映画界の撮影所制度、いわゆるプロダクション・システムに与えた影響力を考察するために、具体的な分析対象として、P・C・L のテクノロジーとプロデュース制度との関係に着目し、研究を遂行する。

第二に、サウンド・テクノロジーの発展によるトーキーの登場は、メディアの状況を混乱させ、またメディアミックスを促進させたという点で、メディア考古学の視点と結びつくものである。

2. 研究の目的

本研究は、戦前日本初のトーキー映画製作所「P・C・L」の、1933 年から 1938 年における歴史的展開をサウンド・テクノロジーとプロデュース制度の観点から捉え、P・C・L が日本映画界の撮影所制度、いわゆるプロダクション・システムに与えた影響力を考察するものである。サウンド・テクノロジーとプロデュース制度を課題に選定した理由は、主に以下の二点である。第一に、1930 年代におけるサウンド・テクノロジーの普及が、映画製作に大変革を起こしたという点である。第二に、サウンド・テクノロジーが生み出したトーキーは、大量生産による経済と消費社会において、既存の伝統や価値を覆す新進の文化産業であったという点である。P・C・L のテクノロジーとプロデュース制度の関連性を思考することは、日本の大衆文化の特性を解明しうる重要な研究であると考えられる。メディア考古学は、過去の様々なメディアを分析することによって、現在のメディアの状況を相対化させる研究である。このようなメディア考古学の視点から、本研究は P・C・L を分析することによって、現在のメディアミックスの起源となる映像文化の理解が可能となる。

3. 研究の方法

初年度の平成 29 年度は、国内外の機関が所蔵する P・C・L のサウンド・テクノロジーとプロデュース制度に関する資料の実地調査にもとづく、データの収集を中心に研究をおこなった。なお P・C・L については、和首都圏および関西圏以外の機関について、初年度中に所蔵状況を調査の上で、その重要性を選定し、次年度に本格的な調査を実施した。平成 30 年度は、前年度に選定した機関における P・C・L の総合的な調査と、サウンド・テクノロジーとプロデュース制度に関する資料の継続調査、補充データの収集に重点をおいて研究を進めた。最終年度の平成 31 年度に、収集したデータを多面的に分析して、研究成果を集大成した。なお研究方法の特色として、テキストデータとデジタル画像を組み合わせたデータベースを構築し、方法論としてデジタル・ヒューマニティーズ (digital humanities) を通したデータマイニングを実施して、新たなデータ発見を積極的に活用して論文や発表に取り入れた。

4. 研究成果

研究成果として、査読付き論文を海外の出版社から論集として三冊出版し、そのうちの一冊は共同編集も行った。さらに三つの国際学会でも発表した。

また国際映画であるボローニャ復元映画祭で一回、同じく国際映画祭であるポルデノーネ無声映画祭で二回キュレーションを行い、世界中の映画専門家や愛好家達に日本の初期サウンド映画を紹介し、日本映画史や大衆文化を広めた。

研究成果は具体的にこれらの4つに分けることができる：

(1) 日本映画が無声から発声に移行する歴史的、社会的文脈を理解するため、当時為された、新たなサウンドテクノロジーをどう生かすべきかについての議論を明らかにした。映画産業に務めた人物(プロデューサー・監督・作曲家・技術家)や評論家等が新聞、雑誌で様々な意見を述べている。論文「Intermediality and Theories of Sound in Japanese Cinema of the 1930s」『Routledge Handbook of Japanese Cinema』Routledge 出版では、これらの内容とともに、機械的な近代化によって生まれた映画とは何かという問いについて分析した。

(2) 日本のサイレント映画からトーキーへの移行期に製作されたサウンド版映画について検討した。サウンド版映画とはサウンドエフェクトや音楽付のサイレント映画である。小津安二郎、溝口健二、清水宏など巨匠達の殆どが1930年代の前半にこの独特な形式で製作した。1930年代後半では、日本のトーキーへの移行期に乗り遅れた三流映画を製作する小型映画製作場にこの技術が残った。日本のサウンド版の発展、改良、そして専門化について明らかにしながら、映画の芸術的な表現のひとつとして映画製作場から映画歴史的な視点から細かく分析した。成果を論文「Between Silence and Sound: The Liminal Space of the Japanese “Sound Version”」『The Japanese Cinema Book』London British Film Institute 出版した。この研究成果は更に二年連続でキュレーターとして日本の国立映画アーカイブ(旧：東京国立近代美術館フィルムセンター)とともに「Saundo-ban: The Japanese Silent Cinema Goes Electric」2017年10月の『The 36th Le Giornate del Cinema Muto』(ポルデノーネ無声映画祭)と「Saundo-ban - 2: The Japanese Silent Cinema Goes Electric」2018年10月に『The 37th Le Giornate del Cinema Muto』(ポルデノーネ無声映画祭)で発表した。結果として、アカデミアの世界だけではなく、国際映画祭を通して幅広く海外の映画界に日本の戦前映画史を伝えることができた。

(3) 1930年代における日本映画と電気音響テクノロジーの関係性と発展についてメディア考古学の視点から明らかにし、『The Culture of the Sound Image in Prewar Japan』(Amsterdam University Press、2020年出版予定)をMichael Raine(Western University, Canada)とともに編集、序説を執筆した。第7章「The Image of the Modern Talkie Film Studio: Aesthetics and Technology at P.C.L.」では、日本初の成功したサウンド映画製作所P・C・L(Photo Chemical Laboratory)に注目し、この製作所がいかにしてモダンなイメージを作り出して行ったか、俳優・音楽・製作所の設備といった点から分析した。

また、P・C・Lのモダンなイメージと女優竹久智恵子について国際会議「Revisiting the Modern Girl: Takehisa Chieko at Studio Toho」2018年3月第59回Society for Cinema and Media Studies(SCMS)学会で発表した。

(4) また派生的に、P・C・Lが製作した新たなリアリズムを持つモダンの時代劇に複数令点を当て「The Japanese Period Film in the Valley of Darkness」2017年6月『The 30th Il Cinema Ritrovato』(ボローニャ復元映画祭)で発表した。

P・C・Lの映画製作制度に関して二つの国際会議「Diamonds of Toho」2017年第16回Kinema Club学会と「The Joy of Work: The Salaryman at Work and Play in Toho's 1950s Cinema」2017年第15回European Association of Japanese Studies(EAJS)学会で発表した。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1 . 発表者名 Johan Nordstrom
2 . 発表標題 Revisiting the Modern Girl: Takehisa Chieko at Studio P.C.L.
3 . 学会等名 Society for Cinema and Media Studies (SCMS) (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Johan Nordstrom
2 . 発表標題 The Joy of Work : The Salaryman at Work and Play in Toho's 1950s Cinema
3 . 学会等名 European Association of Japanese Studies (EAJS) (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Johan Nordstrom
2 . 発表標題 Diamonds of Toho
3 . 学会等名 Kinema Club XVI (国際学会)
4 . 発表年 2017年

〔図書〕 計7件

1 . 著者名 Johan Nordstrom, Editor(s): Hideaki Fujiki, Alastair Phillips., Authors: Aaron Gerow, Alex Jacoby, Hideaki Fujiki, Naoki Yamamoto, Kosuke Kinoshita, Hikari Hori, Manabu Ueda, Daisuke Miyao, Chika Kinoshita, Fumiaki Itakura, Thomas Lamarre, Michael Raine	4 . 発行年 2020年
2 . 出版社 British Film Institute	5 . 総ページ数 604
3 . 書名 『Intermediality and Theories of Sound in Japanese Cinema of the 1930s』第7章『The Japanese Cinema Book』	

1 . 著者名 Johan Nordstrom、Editor(s): Joanne Bernardi, Shota T. Ogawa.、Authors: Ryoko Misono, Hideyuki Nakamura, Diane Wei Lewis, Yuka Kanno, Mitsuyo Wada-Marciano, Anne McKnight, Takeshi Tanikawa, Takafusa Hatori, Alexander Zahlten, Machiko Kusahara, Kyoko Omori, Joanne Bernardi	4 . 発行年 2020年
2 . 出版社 Routledge	5 . 総ページ数 390
3 . 書名 『Between Silence and Sound: The Liminal Space of the Japanese "Sound Version" 』第13章 『Routledge Handbook of Japanese Cinema』	

1 . 著者名 Michael Raine, Johan Nordstrom、Editor(s): Michael Raine, Johan Nordstrom.、Authors: Shuhei Hosokawa, Keiko Sasagawa, Manabu Ueda, Chie Niita, Fumiaki Itakura, Yohei Nagato	4 . 発行年 2020年
2 . 出版社 Amsterdam University Press	5 . 総ページ数 -
3 . 書名 『The Culture of the Sound Image in Prewar Japan』 「序論」	

1 . 著者名 Johan Nordstrom、Editor(s): Michael Raine, Johan Nordstrom	4 . 発行年 2020年
2 . 出版社 Amsterdam University Press	5 . 総ページ数 -
3 . 書名 『The Culture of the Sound Image in Prewar Japan』 第7章 「The Image of the Modern Talkie Film Studio: Aesthetics and Technology at P.C.L.」 (単著)	

1 . 著者名 (共著) Jacoby Alexander, Nordstrom Johan、Editor(s): Catherine A. Suwiec	4 . 発行年 2018年
2 . 出版社 Le Giornate del Cinema Muto	5 . 総ページ数 275
3 . 書名 『Saundo-ban - 2 : The Japanese Silent Cinema Goes Electric』 『The 37th Le Giornate del Cinema Muto Catalogue』	

1. 著者名 (共著) Jacoby Alexander, Nordstrom Johan、Editor(s): Gian Luca Farinelli, Alice Autelitano, Alessandro Cavazza, Mara Carotti, Francesca Marra Coordinamento	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Il Cinema Ritrovato	5. 総ページ数 426
3. 書名 『The Japanese Period Film in the Valley of Darkness』『The 30th Il Cinema Ritrovato Catalogue』	

1. 著者名 (共著) Jacoby Alexander, Nordstrom Johan、Editor(s): Catherine A. Suwieg	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Le Giornate del Cinema Muto	5. 総ページ数 252
3. 書名 『Saundo-ban : The Japanese Silent Cinema Goes Electric』『The 36th Le Giornate del Cinema Muto Catalogue』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

キュレーターとしての支援したイベント
<ul style="list-style-type: none"> ・『Saundo-ban II : The Japanese Silent Cinema Goes Electric』2018年10月、The 37th Le Giornate del Cinema Muto (ボルデノーネ無声映画祭) ・『The Japanese Period Film in the Valley of Darkness』2017年6月、The 30th Il Cinema Ritrovato (ボローニャ復元映画祭) ・『Saundo-ban : The Japanese Silent Cinema Goes Electric』2017年10月、The 36th Le Giornate del Cinema Muto (ボルデノーネ無声映画祭)

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考